

矢板久明

Yaita Hisaaki

矢板直子

Yaita Naoko

新関謙一郎

Niizeki Kenichiro

空間のとらえ方が人それぞれであるように、ディテールの考え方も建築家によってさまざまだろう。そこで、特集の巻頭として、緻密なディテールで定評のある矢板久明さんと矢板直子さんに、ディテールへのアプローチ手法を聞いてみた。聞き手は新関謙一郎さん。前号の特集で取材した住宅「NRS」だけでなく、どの仕事でも建築意図を際立たせるディテールが印象的な人。どうせなら、と、矢板さんたちとは考え方が異なりそうな建築家にあえてお願いした。新関さんには、矢板さんたちが設計した住宅「PATIO」を事前に見学したうえで、座談会を行う「八雲の家」に来てもらった。結果を言ってしまうと、話は、お互いの建築のあり方を探る方向へ進んでいった。言い換えると、ディテールのために一番大事なものは、ディテール以前にあるのかもしれない。

まとめ／加藤純 写真「八雲の家+ポートレート」／藤塚光政 写真「PATIO」／小川重雄

# 矢板久明さんと 矢板直子さんに 新関謙一郎さんが聞く、 建築とディテール

「おまえは柱か、おまえは壁か」

「八雲の家」の北側外観。傾斜地のレベル差を生かした地下1階(RC造)、地上2階(木造)の建物。出窓は通りへ内部の気配を感じさせ、街とのコミュニケーションを図るメッセージという考え方でデザインされた。

——建築にとってディテールが関係するのは、見え方や機能、材質などの要素であると思います。今日はそうした観点を含めて、みなさんにお話しいただきたいのですが、最初に新聞さんから、矢板さんたちの設計された住宅を2軒ご覧になった感想を聞かせてください。

**新聞謙一郎** 先日うかがった住宅「PATIO」(2011)で、矢板さんの設計を初めて目の当たりにし、自分の仕事の仕方を問われるほどの強烈な体験をしました。建物のきれいな部分写真を雑誌で見ても、なぜそうあるべきかがよくわからないことがあります。実物を体感すると3次元でとらえることができ、なぜそのディテールが求められているのがわかってくるので、見る意味は大きかったです。今日の「八雲の家」(11)は2軒目ですから、このあいだよりも少し落ち着いて見ることができたと思います(笑)。ただ、どちらの家でもディテールというよりは、まず建築のあり方や建ち方について意識が向かいました。「矢板さんたちの建築はディテールがなくても成り立つのだろうか、ないとな成り立たないのか、またはギリギリ成り立つところはどこだろうか」ということを気にしながら見ていました。その境界というか輪郭を、今日の話から知ることができればと思っています。

## 要望や必要があつて、ディテールは出現する

**矢板久明**(以下、**久明**) 私たちはふたりとも、比較的大きなスケールの建物から設計のキャリアを始めています。そういった建物では、骨格を決める考え方や空間や光の印象的なシーンなど、設計者として強くイメージすることが必要ですが、住宅では特別に「こうしたい」という意識はもたずに臨んでいます。**矢板直子**(以下、**直子**) 建て主が求めていることや必要な機能をまず知ることが大切なので、私たちがどのようにつくりたいかは関係ないのです。家の形は一軒一軒変わりますし、ディテールも変わってくる。同じような納まりとなることもありませんが、建て主の使い勝手や要望に応じて細部は変わります。

**久明** オーダーメイドの洋服をつくっている気分ですね。建て主の雰囲気や趣味に合うのはなんだろうと考えていくと、建て主と共有するテーマや目標が出てきて、議論しながらつくっていく。要望が難しければ難しいほどそれがエネルギーになりますし、相手の力を借りて思考を進めていくので、着地点が楽しみになります。建築家は建て主の希望を実現する、いわば触媒のような役割だとも思っています。

**新聞** 最初は白紙から始まり、1本の線が出てきて何かが入り出す。こうしたきっかけは、建て主の要望や趣味なのでしょうか。

**直子** 暮らし方全般ですね。居心地がよいという感覚は人によってすごく違い

**久明** 設計者が建物についてまず決めるのはスペックで、そこから金額を出して発注しますので、まずはその枠のなかで考えることになります。ただ、住宅の場合はビルと違ってスペックをもとにした施工図がなかなか用意されませんから、自分たちでまかなわないといけない。いきおい現場に入ってから施工図に近い図を自分たちで描き出すことになりま

す。けれども手元に引き寄せて考えることになるので、論理的な思考というよりも感性的な思考が働くことが多くなり、そのほうがはるかにおもしろい。一方で全体の一貫性は薄くなりがちで、どのようにそれぞれを統合して、統一した美学を出すかについては頭を悩ませるところです。

**新聞** そこはどうしているのですか。最初の方針が通っていて、建築としての総体がしっかりしているので、後からまとめられるということでしょうか。

**久明** そうだと思えますが、実務を始めた頃は、設計や施工の途中で新たな要望が出されることは恐怖でした。自分のストーリーが崩されるのではないかと思っていましたから。今は経験を積んだこともあって、必ず答えは見つかるという確信がありますし、逆に自分の気づかなかったことを知らせてくれるチャンスのようにも思えています。

## 建築としての性能をどう整えるか

**新聞** 「八雲の家」でのスチール枠をまわした開口部の出し方などは、建て主からの要望はとくになかったと思うのですが、どこから出てきたのですか。

**久明** 出窓の飛び出した枠は、ここに通風用の小窓を付ける目的と、リビングのソファから外を眺め、奥行き感と開放感をもたせるといった室内側からの要請や機能をそのまま外に出しました。少しとぼけたような表現です。以前は外観を守る気持が強くて、美学的整合性を意識しすぎてなかなかできなかったのですが、こうしたことをやる勇氣が最近では出てきたように思います。ガラスは、出窓全体をソリッドな塊として表現するために、透明な石のように扱ひ、枠を見せずに構造シールを用いて貼りつけてあります。アルミのフラットバーを裏に使うことも大切で、シールの専門家に強度計算をしてもらったうえで採用しています(3ページ北側出窓詳細図参照)、これは「PATIO」にも共通

### 矢板久明

Yaita Hisaaki

やいた・ひさあき
1955年生まれ。77年明治大学理工学部建築学科卒業。82年東京大学大学院修士課程修了。82、93年谷口建築設計研究所94年矢板久明建築設計研究所設立。95、99年工学院大学非常勤講師。2004年より矢板直子と共同主宰。05年矢板建築設計研究所に改組。

### 矢板直子

Yaita Naoko

やいた・なおこ
1958年生まれ。82年日本女子大学家政学部住居学科卒業。82、2002年アーキブレーション建築研究所。02年内田直子建築研究所設立。05年より矢板建築設計研究所共同主宰。

おもな作品と受賞
「CASA TRIADE」(96)で住宅金融公庫賞「ケアハウス・リバイターガーデン」(99)で彩の国さいたま景観賞・越谷市建築景観賞「磯子台の家」(00)「OPERA」(02)、「ITEMPO」(03)、「ふじみ野の家」(06)「紫水苑」(07)。

ます。寸法でも、身体感覚によって広さに対する感覚は違います。それで、最初のうちはずっとヒアリングします。私たちが「プログラムシート」と呼ぶ表に、建て主の要望を細かく書き出していきます。ヒアリングを重ねるごとに部屋同士の関係性も考えてバージョンアップさせ、予算の概算も出しますが、具体的な形をつくることはこの段階ではあまりしません。

**久明** デイテールはあくまで、要望や必要があつて出てくるものです。たとえばこの「八雲の家」では、階段の踊り場付近で求められる用途や安全性を入れ込みながら出窓部分の縦格子や手すりの形が出てきました。リビングの中の重要なデザインエレメントにもなりました。

**新聞** それはいつ頃の段階ですか。

**久明** 現場に入ってから、それも後半です。ディテールとして検討するのはおもに現場に入ってからで、それぞれの部品を発注する寸前まで描いて検討しています。そこまで進まないで、なかなか手で触れたときのイメージまでできるようにはならないものですから。

**直子** 足したり引いたりといった検討をずっと続けています。自分たちでは「最後の塩・胡椒」と言っているのですが、ギリギリまでがくというか、最後にある美学が見つければいいという感じでしょうか。

## 見た目の美学と機能の両立

**新聞** 最後の塩・胡椒の手順がないと、どうなると思いますか。

**久明** 大事なものが足りないと感じるでしょうね。この住宅での別の例では、キッチンの換気扇を横引き排気の製品にしていますが、これは現場に入ってから、建て主の要望で天井付けタイプから変更したものです。キッチンカウンターの上に、設備機器としてはなくオブジェを置くような見せ方でディテールを考えていきました。現場での変更とはなりませんが、使い方の要望も加わることで、生きたディテールになったように思います。「見てよし、使ってよし」と言いますか、見た目の美学と機能を両立することを考えていくのです。デザイン上で必要だからといってできたものではありません。

**新聞** 私も、建物をつくっていく過程で気づくことや思うところはいろいろあります。現場の変更で気になるのはまず金額や工期の面ですが、建て主に金額が変わることの説明ややりとりはどのようにするのですか。変更する部分の工事はストップして、金額の見積もりをし、それを建て主が了承してから再び工事をするという手順をとるのでしょうか。

**直子** そうですね。ストップはしませんが、できるだけオープンにして説明するようにしています。

性能を	性能を
はるか	はるか
かかわ	かかわ
ってくる	ってくる
大きな	大きな
要素です。	要素です。
——	——
	矢板久明

するディテールです。北側のファサードは、斜線制限から出てきた斜めの形を生かしたもので、内部を反映したため対称形ではありません。この形状は早い段階で出てきました。また、2階リビング・ダイニング・キッチンの頂部のトップライトは、暑くならないよう最小限の幅で設けました。そしてスリット上部に少し大きな空気溜まりを設けてあります。トップライトからの光でここがあたためられ、立ち上がりにつくった風抜きの換気窓を開けると、ドラフトが生じ、風が上流れていきます。建築としての性能をどう整えるかは自分たちの大きなテーマのひとつで、ディテールにかかわってくる重要な要素です。

**新聞** 形状や大きさは最初に出てきて、そこにいろんな要請が入ってくることは想定しながら、それらはほぼ受け入れられるだろう、と考えているということですね。

**直子** プログラムシートを作成する過程で、部屋に必要な要素や部屋同士の関係性は議論しつくされています。そしてかなりの数の案をつくるのですが、この「八雲の家」でも50案は出しています。

**久明** 私が修業させていただいた谷口建築設計研究所では、とにかく案をたくさんつくって検討することを教わりました。そのなかで、「汗をかく」方法とそこの大切さを知りました。エレベーションの検討といえば、「まず100枚」と言われましたから。それは淡々と検討を進めていくうちに覚えてくるものがあるということ、多くの場合、後から論理的な筋が浮かんできます。私たちもこうしたアプローチをとっており、こうした姿勢は谷口さんから教わったように思います。

## ディテールとコストと時間

**新聞** 汗をかくということでは、ディテールについてはどうですか。やはり数多く検討されるのでしょうか。

**久明** デイテールの場合は数多くというよりも、考え方を見つけることを重視します。ディテールの考え方には2種類あると思います。最初からディテールにアプローチする方法と、後からアプローチする方法です。前者は、骨格を成り立たせるものや建設プロセスから、またコスト面からアプローチします。後者は、使いやすさや触つてどうかということからアプローチします。言い換えれば、どのレベルの視点から見て考えるかということです。鳥瞰的な視点と、

Niizeki Kenichiro

### 新聞謙一郎

にいぜき・けんいちろう
1969年東京都生まれ。93年明治大学理工学部建築学科卒業。95年同大学院修士課程修了。96年

年き設立。2002年NIIZEKI STUDIOに改組。07年「八街の家」(02)Detail Prize受賞。そのほかのおもな

作品
「WEP 下北沢」(06)「NRS」(08)「NGT」(09)「ZMZ」(10)「HTG」(10)。\*「TOTO通信」2012年新春号での「NRS」の取材記事は、ウェブサイトで(も)ご覧いただけます。
www.toto.co.jp



直子 プランを描かなくても、数字で丁寧に分析していけば、それらの数字が言葉のように語りだします。

久明 全体予算のコスト管理、要望の整理、プログラムと面積をどう描くかが私たちの仕事。そこまでで8割方は終わり、ここが見えてくると後はだいたに乗ってきます。

新聞 コストと同時に、時間もかかりますよね。形を変えらるとなると、再度発

皮膚感覚の視点というのですが、対象を見る距離が変わるといって、私たちはその両方を行ったり来たりして進めていきます。

新聞 やはり、コストコントロールがすごく大変そうですね。

久明 ただ、建物の大きさとコストを出すのに時間をかけていますから、大きくはずすことはありません。面積やボリュームを出して仕様を決め、地下は1・4倍、吹抜けは0・5倍など、それぞれに対応する独自の面積指標と坪単価をかけて算出しています。

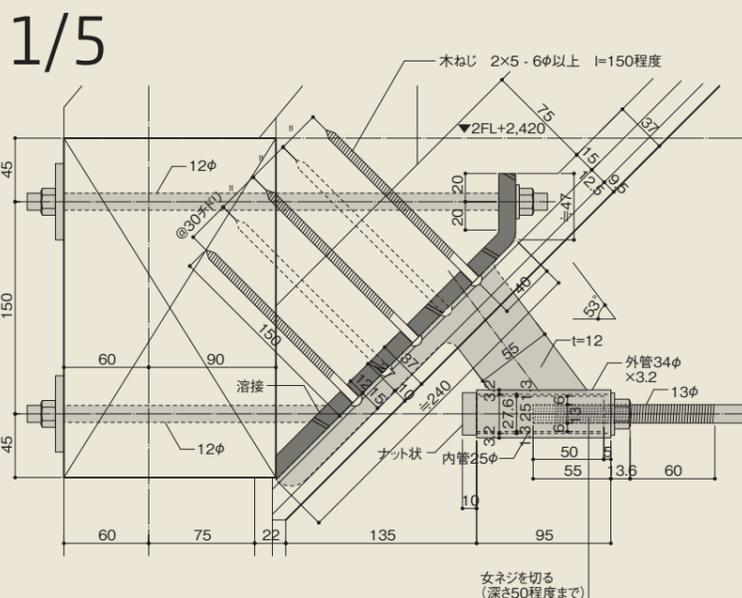
写真右/北西側全景。中/西側外観。北側の出っ張った表現とは異なり、壁が穿たれたようにバルコニーが設けられている。左/アプローチ階段と本体は緑が切られている。

### タイロッドは空中に浮かぶように

桁同士をつなぐ4本のタイロッド(13φ)は、天井面からプレートを出す形状にすることにより、棒が空中に浮かぶような見えがかりとして、軽快さを表現している。なお、タイロッドのプレートの角度は、断面詳細図でわかるように、左右ふたつの延長線がちょうど床面で交わるようになっていて、細部にわたりプロポーションが考えられている(断面詳細図の赤と青の線は、プロポーションを示し、解説は12ページ参照)。

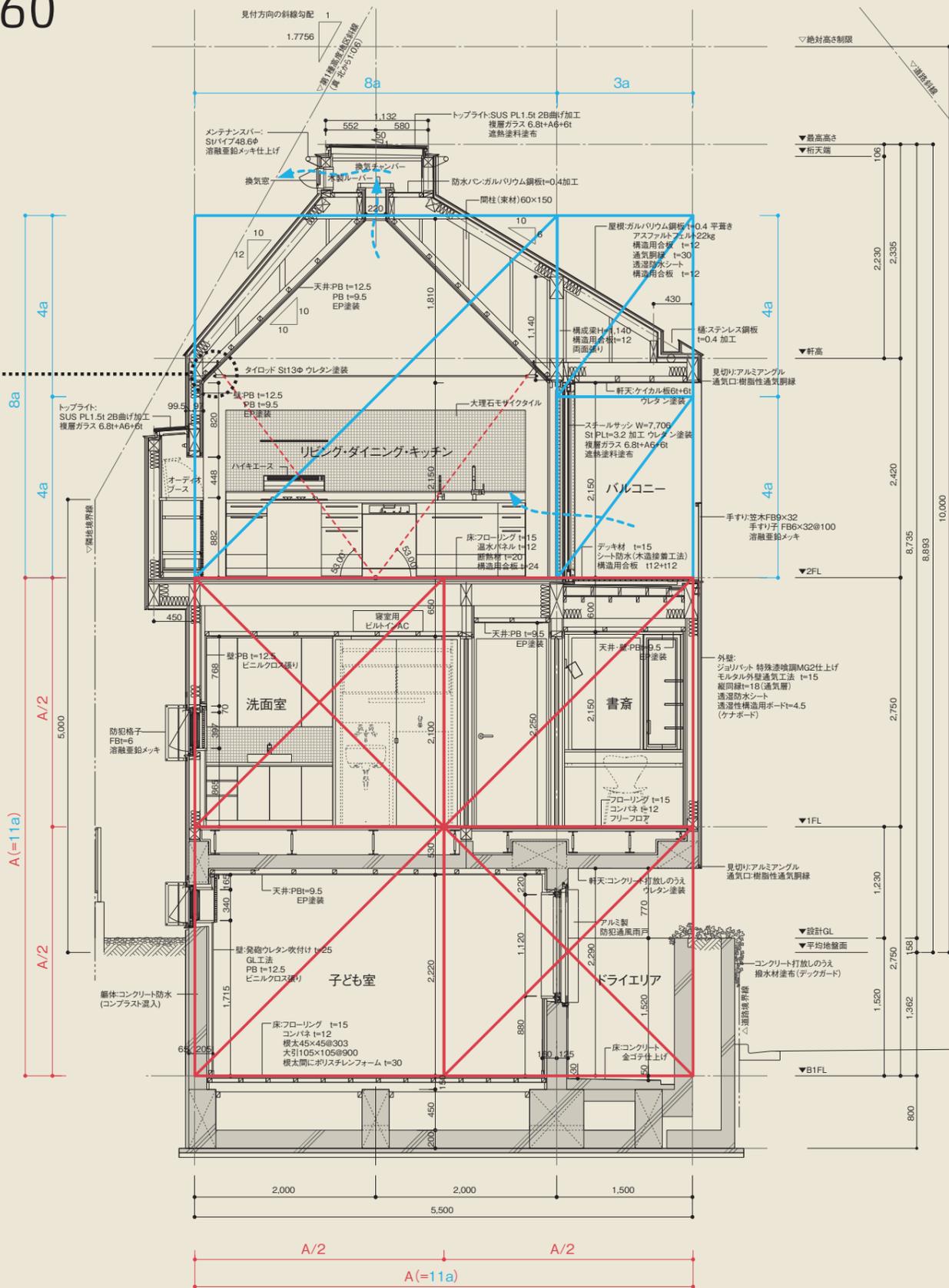


### タイロッドの断面詳細図



### 「八雲の家」の断面図

1/60



新聞 変更の余地や余裕は計画に織り込んでいるのですか。というのも、その設定が最終の出来上がりにも影響してくるはずだからです。要望をなんでも受け入れて進め、原寸で体験して新たに追加や変更をしていくとなると、もともと骨格をどのように考えていらっしやるかが気になります。

見えない関係が建築全体を決めていく

新聞 変更の余地や余裕は計画に織り込んでいるのですか。というのも、その設定が最終の出来上がりにも影響してくるはずだからです。要望をなんでも受け入れて進め、原寸で体験して新たに追加や変更をしていくとなると、もともと骨格をどのように考えていらっしやるかが気になります。

久明 工法を工夫し、設計から竣工までが7カ月というごく短い期間の案件もあります(「打越の家」05)。

直子 時間の制限がとりわけ厳しい場合は、工期を短縮するために工法から考えています。

久明 もちろん、施工会社の経験や態勢、能力により異なります。大きな建物を手がける大手ゼネコンではサイドステップを踏みながら変更に応じていくことができますが、住宅規模では時間が延びるリスクが大きい。本当は事前に決めておきたいことですね。

写真上／2階のリビング・ダイニング・キッチンを見通す。天井頂部に幅220mmのトップライト。左手収納奥にもトップライトがある。キッチンは壁を彫り込んで、かまどのように設けられている。計画全体を通して、壁に対する関係が慎重にスタディされている。右中／上の写真の見返し。桁同士をつなぐ4本のタイロッド（9ページ詳細図参照）。右下／階段越しに出窓を見る。左下／玄関や窓まわりは、2.3mm厚のステンプレート溶融亜鉛メッキ仕上げ。



▲リビング・ダイニング・キッチンを見通す

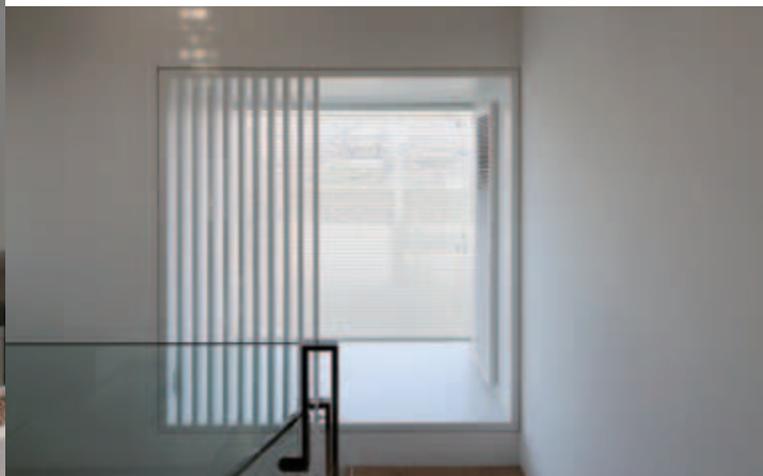
▼ 玄関と出窓

## 「八雲の家」

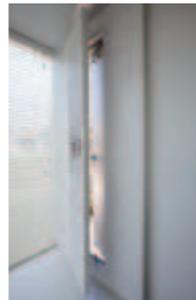


▲リビング・ダイニング・キッチンを見通す

▼ 室内から出窓を見る



▲ 出窓側面の通風扉



▲ 出窓の通風ルーバー



▲ 出窓内部

写真上／出窓のガラスはフィックスだが、東の側面に通風の開口部が設けられている。庇の付いた部分はその扉。中上／通風窓の内側は、網が張られた木製ルーバーとなっている。中下／出窓には、季節ごとにクリスマスツリーやお雛さまなどが飾られ、住まいの中でも特別な場所として楽しまれているという。下／キッチンの換気扇は、横引き排気の製品がカウンターの上にオブジェのように置かれ、その上部には整流板として、6mm厚の強化ガラスが壁に差し込んだような表現で取り付けられている。

キッチン



久明 骨格としては空間の質をどう確保するかが重要で、それには空間の大きさやボリュームが深くかわっているとあります。たとえばリビングの標準の広さは、ソファを置いた暮らしでは理想は16畳。自分が育った環境から出てきている広さなのですが、そこからスタートして全体とのバランスで決めていきます。そして、空間の骨格をつくる最後の段階として、プロポーションが大切です。この「八雲の家」では、1階の平面は正方形がふたつ入る5・5m×11mの寸法をしていて、リビングの断面は正方形が入るようになっていきます。プランニングが定まってきた段階でプロポーションを整えてボリュームを決めるこの手順は、私たちは重要なステージとしてとらえています。「PARTIO」では、2対3のプロポーションの長方形が採用されています。



空間の骨格をつくる最後の段階として、プロポーションが大切です。

—— 矢板久明

新関 建築にさまざまな要素が積み重なっているとき、使い勝手のために並ん

### 「ぞんざいな感じ」をめぐる

くうちに、だんだんと概念が現実化し、ディテールを思考することを通して着地させることができますようになります。概念を現実化させるのに必要なのがディテールだとすれば、プロポーションを整えることも同じような位置付けだと考えています。

出来上がりをきれいに  
見せようというのではなく、  
成り立ちを見せて  
後からでも  
プロセスがわかるように。

—— 矢板直子



直子 落ち着き、疲れない空間づくりには、バランスが重要です。最後に調整をしていく手順をとることが、その役に立つということです。  
新関 整えられるとどうなるのでしょうか。  
久明 「建築」になっていく、ということですね。部屋と部屋の大きさや関係性に、秩序を与えているのだと思います。最後に出来上がったところで安定し、包まれたような居心地のよいスペースになると感じます。  
新関 矢板さんたちは建物に、安定感や調和をもたせることを目指していらっしゃるのでしょうか。  
久明 そうですね、私たちのつくる建築は古典的なものかもしれません。それはオーダーが形づくると安定感であり、秩序ある美学を私たちが希求している結果ともいえます。コルビュジエも建築とは何かと問われたインタビューに「考えるに値するものに秩序を与えることだ」と答えていたことをいつも思い出します。プランができたときに、ひとりでに正方形や5対3などのプロポーションが現れていることに気づくことも多くあります。そのプロポーションを混在させずに一貫させることで、建物自身のキャラクターや個性となっていくと思います。私たちがほかの要件もすべてをひとつの器に入れて、カタカタと揺らしながら調整をしてい

建築概要	
所在地	東京都目黒区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	矢板久明+矢板直子/ 矢板建築設計研究所
構造設計	杉浦克治/構造設計社
設備設計	島津充宏/島津設計
コーディネート	ザ・ハウス
施工	日祥工業
構造	木造、一部鉄筋コンクリート造
階数	地下1階 地上2階
敷地面積	106.32㎡
建築面積	63.61㎡
延床面積	164.55㎡
設計期間	2009年1月~2010年3月
施工期間	2010年7月~2011年7月

おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板 t=0.4mm平葺き
外壁	透湿性構造用ボードのうえ モルタル外壁通気工法、 ジョリパット特殊漆喰調 MG2 仕上げ 防汚塗料塗布
開口部	特注スチールサッシ、 一部アルミサッシ
出窓部	透湿性構造用ボードのうえ PBt=12.5mm StPLt=2.3mm 溶融亜鉛メッキ仕上げ
外構アプローチ	コンクリート金ゴテ仕上げ
外構壁	コンクリート打放し 撥水材塗布

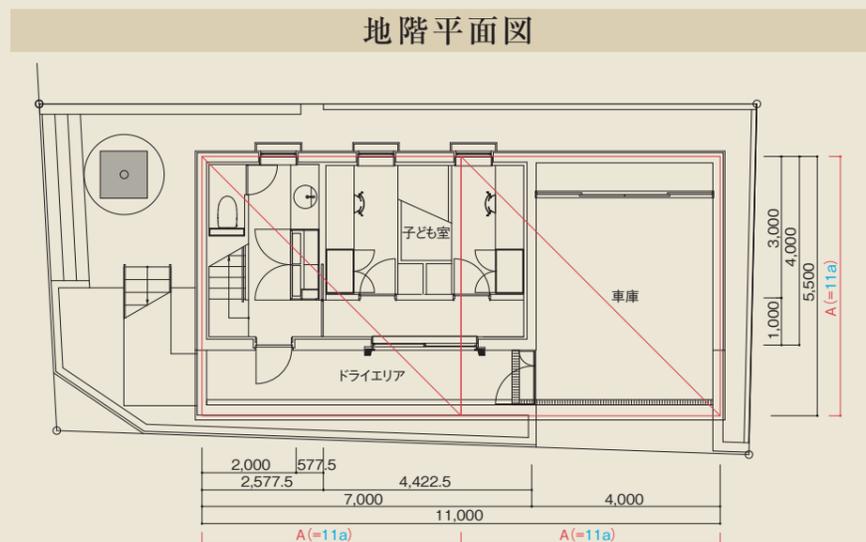
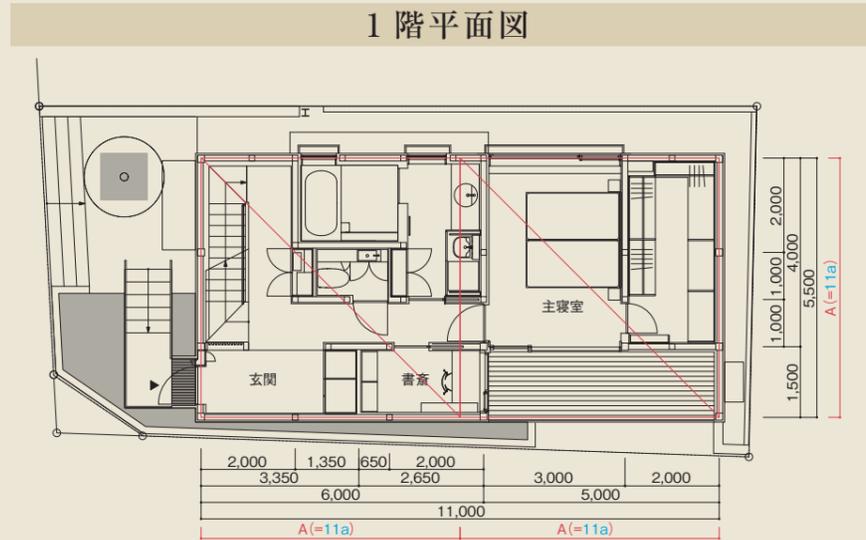
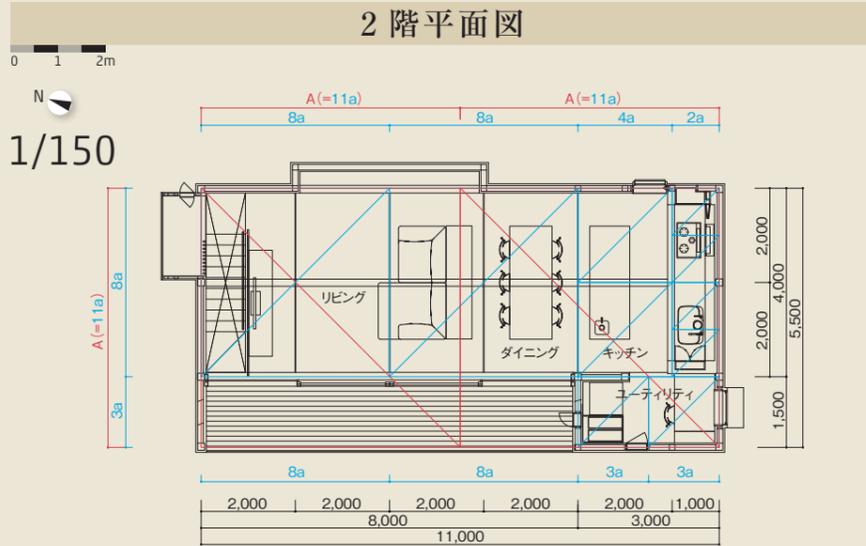
おもな内部仕上げ	
リビング・ダイニング・キッチン	
床	スギフローリングt=15mm オスモワンコートオンリー拭き取り
壁	PBt=12.5mm+9.5mmAEP、 大理石モザイクタイル張り (キッチン前面)
天井	PBt=12.5mm+9.5mmAEP
玄関	
床	コンクリート金ゴテ仕上げ 樹脂ワックス塗り
壁	PBt=12.5mmAEP
天井	PBt=9.5mmAEP

寝室	
床	スギフローリングt=15mm オスモワンコートオンリー拭き取り
壁	PBt=12.5mmAEP
天井	PBt=9.5mmAEP
浴室(ハーフユニットバス)	
壁	モルタル下地のうねタイル張り
天井	珪酸カルシウム板t=6mm 2枚張りUP

洗面室・トイレ	
床	コンパネt=12mmビニルシート張り
壁	PBt=12.5mmビニルクロス張り
天井	PBt=9.5mmビニルクロス張り

# 「八雲の家」

House in Yakumo



## プロポーションを当てはめると建物がフワッと自由になることが多い

矢板さんたちは、概念を現実化し、着地させるために必要なものとして、ディテールとプロポーションを挙げる。プランニングが定まってきた段階で、プロポーションを整えてボリュームを決めるというイメージがわくが、逆に、プロポーションを当てはめると空間は膨らみを得て、建物がフワッと自由になることが多いと矢板さんは語る。「八雲の家」では、左の平面図と8ページの断面詳細図でわかるように、平面・断面ともに、正方形(キューブ)の中に、青で描かれた小さな正方形(キューブ)が入ったような関係となっている(a=500mm)。

写真上/玄関の靴収納。収納に関しては、これ以外にも子どものおもちゃや絵本、オーディオ機器、レコードやCDなど、目的別に細かくデザインされている。中/玄関の収納扉は、枠を設けずに、パーティの板が壁一面に張られたような表現となっている。下/1階のトイレ。



でいるだけでは完全な秩序になりきれないのでしょね。オーダーやプロポーシオンで概念的にまとめていく。この手法を矢板さんたちがどのタイミングでどう使うかが、話を聞く前はわかりませんでした。はじめから意識している、思考が縛られてしまうので。

**久明** 先ほどお話ししたように、基本設計の後半ですね。はじめから意識していると、思考が縛られてしまうので。

**直子** 私たちは「解ける」という言葉をよく使います。オーダーが建物に重なってさまざまなことが解決したときに、オセロの面が揃うように感じます。構造上の通り芯のとり方も建物によって変わってきます。「八雲の家」は木造なので柱芯とついでいますが、「PATIO」では内法で押さえています。

**新関** これにもビックリしましたね。

**久明** そうして空間が立ち上がってくると、そこに意思が宿ったように感じられ、空間にぞんざいな感じがなくなってきました。

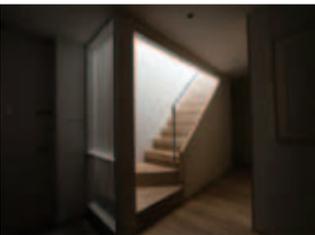
**新関** 「ぞんざいな感じ」というのはどういうことですか。

**久明** 端的にいえば、設計で考えるのを忘れたところですね。たとえば、たくさんの部品が意図どおりに一直線に並んでいるだけで、それらの部品が喜んでるように見えますが、そうでない場合はぞんざいに見えてしまいます。設計で検討しつくされていないと出来上がったときにどうなるかわかりません。

**新関** 耳が痛い話ですね……。

**久明** すべてが行き届いている感じ、というのでしょか。建物を構成する一つひとつを見るとき、「こう考える」ということが手紙に書かれたメッセージのように伝わってくるのが重要だと思えます。たとえばミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe/1886~1969)の設計した「ファンズワース邸(1950)では、既製のスチールアングルを使ってきれいな窓がつくられています。プランからディテールまで意図が一貫して表現され

1階玄関から階段を見る。壁がくり抜かれたような表現で、ここでも壁が意識されている。



## 建築のなかの「おまえ」

**新関** 矢板さんはディテールを考えるにあたって、「おまえは柱か、おまえは壁か」と問いかけていくようなアプローチをしていくと聞きました。これは壁や柱をどのように見せるかで印象が変わってくるということですか。

ていて、どこを切ってもファンズワース邸とわかる。そこには思想があるし、驚くほど丁寧です。

**新関** どこを切っても類似するという姿勢は矢板さんたちのディテールそのもので、その姿勢を建物に込める感じが伝わってきます。プロポーションを当てはめて最後に締めていくことを聞くと、自分は逆だなと思いました。もしプロポーションのことを考えていても、進んでいくうちにあまりまとまっていなくていいのではないかと思えます。最後はむしろ緩めていきますから。

**久明** 私はむしろその反対で、プロポーションを当てはめると空間は膨らみを得て、建物がフワッと自由になることが多いように感じています。

**新関** そうですか。ただ、その感覚はわかるような気がします。建物が違う次元に昇華するような感じなのでしょうね。また、「ぞんざいな感じ」という言葉が出てきたとき、自分は「ぞんざいな建築」を目指しているところがあるなと思いました。ディテールという袋小路のなかに入っていくと、食べたいところがあるなと。土を掘ってジャガイモが出てくるときに、形は違っていても食べたいのですね。土を掘ってジャガイモが出てくるときに、形は違っていても食べたいのですね。土を掘ってジャガイモが出てくるときに、形は違っていても食べたいのですね。

というようでありたいと思えます。サービス精神としてはディテールを検討しますが、本当の興味はありません。つくるときに職人が思いつきで手を動かしても、それを受け入れられる人格を建物にもたせたいと考えています。ですから、ディテールも物件のスタッフまかせにしています。



「PATIO」の2階外壁はキーストンプレート。一部が、通風のため電動で開閉する(写真5点=小川重雄)。

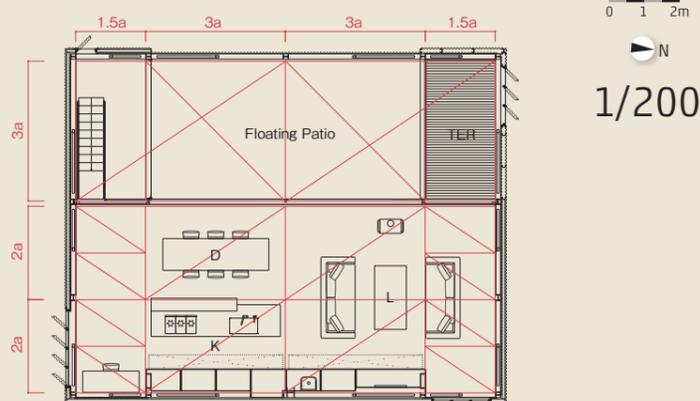
建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦
設計	矢板久明+矢板直子/ 矢板建築設計研究所
構造設計	杉浦克治/構造設計社
設備設計	島津充宏/島津設計
コーディネート	ザ・ハウス
施工	日南鉄構
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
階数	地下1階 地上2階
敷地面積	172.19㎡
建築面積	79.41㎡
延床面積	226.86㎡
設計期間	2006年5月~2009年6月
施工期間	2009年7月~2011年11月

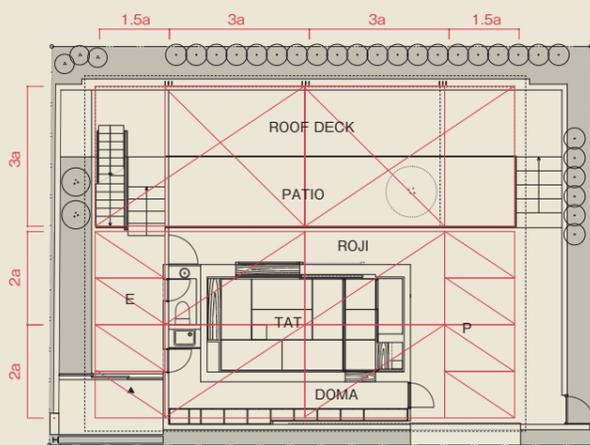
# 「PATIO」

パティオ

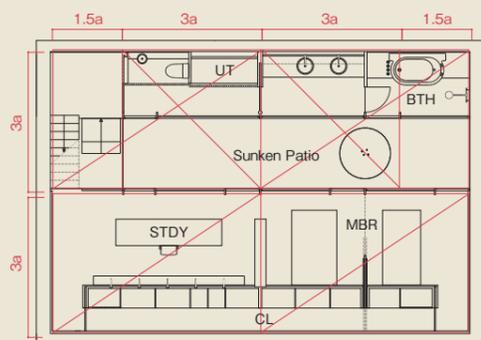
## 2階平面図



## 1階平面図

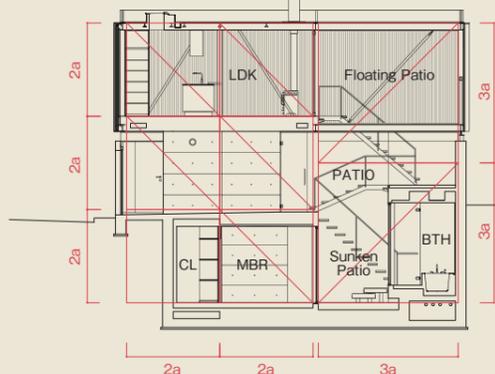


## 地階平面図



秩序ある関係を「PATIO」のプロポーションは2:3の長方形。通り芯のとり方は建物によって異なり、木造主体の「八雲の家」は柱芯、RCと鉄骨造の「PATIO」は内法で押さえてある。地階と1階がRC造、2階は鉄骨造。

## 断面図



東側外観



2階リビング・ダイニング・キッチン



西側から東側を見る



北側から南側を見る

新関 先日「PATIO」を拝見したとき、布をまとったようなあり方を求めた、という説明を受けました。そのとおり柔らかさを感じた一方で、柱や梁は衣を受けるために必要かもしれないけれど、ないほうが衣の感じが出たのかも

### 論理的か、数寄屋的か

新関 同じ人間が設計していれば、たぶん同じこととしよう。たかさんの「おまえ」に同じ服を着せるか、チーム名をつけるか。それぞれは違うことを話していても、同じように見えると思います。自分は「おまえ」というとき、ひとりしか考えないようにしているように思います。そのひとりをつくるために建築をつくる。「ここにもいた」という感覚はわかりますが、自分には大変すぎるでしょうから。図面の線も、一本に重ねていきたい。線を消したいという意味ではありません。さまざまな理由で線が並列になっていくのがイヤで、ひとつでたかさんのことを解決するような線を引きたいと考えています。



矢板さんたちの建築では、階段と踊り場の隙間に「おまえ」が見えてくると、新しいディテールがそこに必要になる。

—— 新関謙一郎

久明 そうです。「おまえは誰だ」と問いかけると、それが壁として意識されるようであれば、どのような工法に由来しているのか、どのような成り立ちをしているからなのかと考えます。たとえばこの「八雲の家」の玄関に設けた収納では、枠を出さないことでバーチの板が取り付く壁として意識されます。階段は、壁がくり抜かれたようなソリッドな表現にしています。キッチンでも枠を壁の中に入れ込むことで、壁に孔があいたような意匠になっています。これは、全体を塗り込められた壁として扱うべき、と気づいたときから始まります。

新関 矢板さんたちの設計した建築では、すごくたかさんの「おまえ」がいて、それぞれに意思が込められているように感じました。階段と踊り場の隙間に「おまえ」が見えてくると、新しいディテールがそこに必要になる。でも、全体を意識するなかで考えられていくので、じつは合唱のようにまとまっていると思います。建物を見つめて、新しい「おまえ」がもういないとわかった時点で終わりのだろうと感じました。

Special Feature "On Details" Chapter1/ Round Table + Case Study

新関 物と物の当て方を見て、そう思いました。久明 ある建築家からは自分たちの作風について「正対して見れば古典、斜めから見ると近代」と言われたことがあります。建物が対称形をしていても、空間は流れるように感じるという意味です。この流動性は、感性を動員しながらつくりあげるという意味で数寄屋的かもしれません。とくにディテールを考えているときは、まずは成り立ちなどを論理的に考えながら、一方で、感性でデザインを進めます。そしてまた客観的思考に立ち返り、実用的で機能的なディテールを概念化して統合させていくことになります。これは、私たちがずっともちつづけているテーマです。

久明 構造合理主義ではないし、どこか数寄屋的な考え方をしているのでしょうか。

新関 構造上の力の流れも興味深かった点です。地面に力が流れていくときに、階ごとに壁の位置を移動しながら伝えていくのを見るのは不思議な経験でした。構造の合理性を純粋に追求してはいないところに、矢板さんたちの意志を感じたのです。

久明 プレースをはずすのは可能でしょうか、構造を考えると面や芯からはずれて余分なコストがかかってくると思います。また部分的に開閉も考えていたので、外皮は構造から自由であることも必要でした。あたりまえにやっていたら、どこまでできるのかという範囲で止めています。

直子 構造も、RCスラブから鉄骨への流れは見えるようにしたいと考えていました。アクロパティックなことは目指していません。

新関 構造上の力の流れも興味深かった点です。地面に力が流れていくときに、階ごとに壁の位置を移動しながら伝えていくのを見るのは不思議な経験でした。構造の合理性を純粋に追求してはいないところに、矢板さんたちの意志を感じたのです。

久明 ありようをそのまま見せようということですか。

直子 つくり方を表に現して見せると、なぜ? とよく聞かれます。